

5. コロンビアの体質 8

天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

コロンビアの体質と題し、調子によって国民的性格を書いていたら8回目になってしまった。あらためて奥が深いことを認識したので、しばらくこのテーマを続けることをお許し願う。

さて、以前表記した「国民的性格」の項目を再編したい。前々回(第15回)の項目の前半(1.個人主義、2.陽気、3.約束を守らないことが多い、4.時間厳守ではない)は、すでに述べたので触れないとして、5番目の項目以下を再検討し、大幅に軌道を修正したい。

資料の一つとして、『コロンビア人、どんな私たち?』という本⁽¹⁾から、コロンビア人気質を参考にした。外国人ではなく、コロンビア人が分析しているので、その点は納得できるのではないかと思う。その国民的性格の項目は次の通りである(原書にあった番号は省く)。

抜け目なさ・悪賢さ、日和主義・都合主義、独断の主義者、不寛容主義、地域主義者、過激派、熱血感がある、攻撃的、衝動的、洞察力がない・先読みできない、気まぐれ屋、ユーモアのある人、無責任、批判好き、闘争的な、平凡な、浪費家、懐疑論者、無関心者、怒りっぽい、夢見る人、形式主義者、表面だけの薄っぺらい人、教区主義、内気な人、勤勉、反逆者、感化されやすい、順応主義者、物忘れする人⁽²⁾。

個人的には、上記の色々な性格にプラス「見栄を張る」を付け加えたい。周知のように見栄を張るというのは、周りに対し、見た目・外観を飾るということだが、ラテンアメリカの中でもコロンビア人はとくにこの性格が強いと思う。コロンビア人自身の「元」が良いので(特に女性)、着飾り甲斐があるのかもしれない。
*抜け目のなさ・悪賢さ

さて、前々回に「下心・賢明・鋭敏さ」と書いたが、「抜け目のなさ・悪賢さ」という表現の方が的を射ている。賢明は賢さであるが、その奥に何か見返りや求める行為がある場合は「下心、悪賢い」と結びついていってしまう。もっと直接的に言えば「インチキ・詐欺」にもつながっていく。スペイン語で要領のいい人のことを「vivo」を使うことがある。動詞「vivir」(生きる)から派生した言葉だ。

「スペインの王立アカデミー」(日本で言えば国語審議委員会のような機構)が発行する国語辞書で形容詞「vivo」は、抜け目ない・才覚に長けた・機知に富んだ、という意味に等しいが、我が国では『いかさまをする人・ペテン師』と同義語であるという説明を見つけた⁽³⁾。

この上記の意味の他に「生き生きとした、活気のある、鮮やかな、強い」などプラスのニュアンスで使用されている。本来はこのような使用法が主流だ。しかしながら、コロンビアでは少し皮肉っぽく捉えられ、賢明な人、機知に富んだ人は物事をそつなく仕上げる。当然要領が良いし、時には「近道」もする。そして他人を利用したり、騙したりもすることにも繋がっていく。「要するに抜け目ない人はどんな社会でも存在するのだが、私たちの社会では数えきれないほど存在するのである⁽⁴⁾」。すなわち、数・程度の問題ということか。

*「先住民の悪意⁽⁵⁾」という恵み⁽⁶⁾

この国民的性格は、「マリシア・インディヘナ(先住民の悪意)」

という伝統的精神に起因しているという。誤解のないように記すが、決して先住民や祖先が悪意を持っていたということではない。少々抽象的にいえば、陰険な意図や自分が言うこと・することによって相手に迷惑をかけるような、善悪基準でいえば悪の部類に入るような伝統的社会病理と言える。平たく言えば、自分中心的行為の精神である。

では、現実の例を紹介しよう。

- 1) 交通関係で、一刻も早く着きたい、行きたいと思い、人も車も信号無視をする人、一方通行を無視する人。渋滞の列からはみ出て追い越すという車。並んでいる列の割り込み。
- 2) 接客:役所、会社の事務手続きでいつも早く処理を急ぐ人。列は守らないし早く対応をしてもらいたい人たち。
- 3) 手続き・許可証:こっそりとお金を払って(つまり賄賂)、許可証や証明書を早く作ってもらおう。賄賂で結果を都合のいいように仕向ける人たち。
- 4) 罰金は払わない。刑罰の免除。

日本でも「よくいるんじゃないの?」と言うだろう。事実、こういう類の「人種」は世界でどこにでもいる。このような“自己チュー”の「要領よさ」とは一つの才能として、コロンビアの場合は「うまくやった」と称賛されるようだ。つまり「恵み」なのである。親がそういうズルをすれば、子供はそれを真似る。学校の成績、懸賞、はたまたスポーツの試合でも勝つためには手段を選ばない。このような人種は家族ぐるみの「抜け目なさ教育」を行う。

*正当性:植民地政策と貧富の差

なんとかして「うまくやる」ことは、自分たちの生活を守る・続けるという理由によって正当化される。これは500年ほどの間に形成された生活の知恵、つまり「マリシア・インディヘナ」という精神が形成した社会の一つの精神行動なのである。

ラテンアメリカは、社会の格差が日本とは比べものにならないくらい大きい。現在でも、貧しい人たちは、どんなことでもしないと、生きていくことができない。少しでも要領よく生きる才能だといっている。この「マリシア・インディヘナ」精神は、ハングリー精神の別な現れ方と言ってよいかもしれない。

一方、ラテンアメリカのような多民族社会では、天理教という「一手一つ」や一致団結がなかなか難しいところもあるだろう⁽⁷⁾。

こういう社会においては、しばしば政治が腐敗する。政治家が国民のことを考えず、政界に腐敗、汚職が蔓延し、国家が「悪賢い」集団になる傾向があるからである。

[註]

- (1) German Puyana García, *¿Cómo somos? Los Colombianos*, Panamericana, 2005.
- (2) 同上。
- (3) <https://www.elpais.com.co/opinion/columnistas/diego-martinez-lloreda/lamalicia-indigena.html> El País, junio 21, 2018.
- (4) *¿Cómo somos? Los Colombianos*, p. 57.
- (5) スペイン語では、“malicia indígena”。
- (6) https://www.elcolombiano.com/historico/indigenamente_maliciosos-JEEC_109044.